

此を「知の至」といふなり。

右大學章句の分章と補傳とを綜合して考へると朱子の大學に對する見解はよく分明する。即ち朱子によると大學第一章に大學教育の目的は、(一)明德を明かにすること、(二)民を親おろしたにすること、(三)至善に止ることの三綱領にあつて、この目的を達成するためには、(一)格物、(二)致知、(三)誠意、(四)正心、(五)脩身、(六)齊家、(七)治國、(八)平天下の八條目の順序により脩養すべきことを説いたものであると見、傳の十章の内初の四章はその三綱領と本末とを解釋し、後の六章は八條目を解釋したものと考へたのであるが、その修養の第一著手點ともいふべき格物致知の傳が闕けてゐると見た彼は右に引用したやうな補傳を作つた。この補傳は大學章句の眼目ともいふべきもので之が補はれたことによつて大學全體が朱子の道德説を基礎付けることに成つたのである。既にのべた通り朱子は太極の一理が動いて形而下の物になると、理氣の對立があらはれて、理が萬物の性を決定し、氣が形を賦與する、さうして萬物の性は皆理全體を完具するものであるが、萬物は形氣拘束をうけて理が暗まされて居る、そこで一々の物につき其理を窮めることによつて、我の知を擴充することが道德であり修養であると考へて格

物窮理を修養の第一歩と説いたのであるが、大學がかかる道德説をのべるものとされるのは全くこの補傳が加はつた結果である。補傳は朱子大學章句の大眼目であるが此外にも猶一二注意を要する點がある。その一は格物の格の字を至ると解して格物は物の理に窮め至ることだと説明したのがその一である。又三綱領の一親民の親の字を新の字の假借と見て民を新たにすると解したのがその二である。ところが陽明はこれら諸點に於いて朱子に服せず、大學は矢張り古本のまゝがよいと主張して古本大學を出版し、これによつて陽明の哲學道德説を裏書きするものとした。

## 二 古本大學の出版

年譜によると陽明は龍場にゐた頃から朱子の大學章句に疑を懷き、禮記の中から大學の古本を手寫して、之を熟讀精思した結果、(一)大學は本來一篇の文章で經傳の區別が存せないこと、(二)格物致知は誠意の工夫であつて別に傳を補ふ必要のないこと、(三)朱子の解釋に誤謬のあることに氣付き、遂に正徳十三年(一五一八)を以て古本大學を出版したと記してゐる。

現に文録卷四にのせられた「大學古本序」に、

舊本析たれて聖人の意亡ぶ、……之を補ふに傳を以てして益々離る、……分章を去りて舊本に復し、傍之が註をなして以て其義を引く、聖人の心を復見して之を求むる者その要あるに庶幾し。

といつてゐるのは正に之にあたるのである。これによると陽明の大學に對する見解は朱子の章句と甚しく相違してゐる。そこで古本大學が出版された翌々年羅整菴は書を陽明に遣つて「足下が朱子の章句を非として古本に復さうと主張される理由は朱子の格物説が理を外物に求めるのをきらつて、只主觀を省察することによつて格物を解しようとするにあるらしいが、これは反觀内省といふことだけを重視して講習討論を無視するものでないか」と詰問した。之に對し陽明は、

夫れ理には内外なく、性も内外なし、故に學も内外なし。講習討論も未だかつて内に非ざらんばあらざるなり、反觀内省も未だかつて外を遺さざるなり、……理は一のみ、其理の凝聚を以て言へば則ち之を性といひ、其凝聚の主宰を以て言へば則ち之を心といひ、其主宰

の發動を以て言へば則ち之を意といひ、其發動の明覺を以て言へば則ち之を知といひ、其明覺の感應を以て言へば、則ち之を物といふ。故に物に就いていへば之を格といひ、知についていへば之を致といひ、意についていへば之を誠といひ、心についていへば之を正といふ。正とは此を正すなり、誠とは此を誠にするなり、致とは之を致すなり、格とは此を格すなり、皆所謂理を窮めて以て性を盡すものなり、天下性外の理なく性外の物なし。學の明かならざるは、皆世の儒者が理を認めて外となし物を認めて外となすに由るなり。と反駁して、且つ、

大學古本は乃ち孔門相傳の舊本のみ……舊本の傳はる數千載なり、今其文詞をよむに既に明白にして通ずべく、其工夫を論ずる又簡易にして入るべし。亦何の按據する所ありて、此段の必ず彼にあるべく、彼段の必ず此にあるべきと、此の如何にして缺け彼の如何にして誤るとなして遂に之を改正補輯せんや（傳習錄中、答羅整庵書）。

と主張してゐる。之を熟讀すると朱子と陽明との大學に對する見解の相違は、その哲學の相違に本づくもので、朱子が理氣の對立を認めて内外即ち主觀と客觀を分けて考へたのに對し、

陽明は客觀の如く考へられる外物の理も畢竟吾心の條理に外ならぬと觀た結果、大學の修養は致良知の外になく、格物とは良致の發動する意念の一々について非と判斷するところを去り、是とする所について、それを正しく行ふこと以外にないと解釋して、遂に朱子の分章と補傳とに對し反旗を翻したのである。さうして大學全體の陽明の見方は「大學問」の中に詳しくのべられて居る。

### 三 大學問

「大學問」一篇は文錄續編の首にのせられてゐるが、その編者錢德洪の言によると、此篇は嘉靖六年（一五二七）陽明が思田の討伐に出征する際德洪に付囑した最後の教訓であつて、陽明は常に初見の士に接する毎に學庸の首章を説いて聖學の全功を指示したといふから、此篇は陽明學說の全體を最も簡明に説破した最後の教典と見てよい。そこで大學問の要點を抄譯して左にあげる。

大學とは大人の學といふ意である。大人とは小人に對する名稱で、小人は形態を區別して

我と汝とを分つが、大人は天地萬物を一體と見て天下を視ること一家を視るが如くである。試に一例をあげて説明するならば、嬰兒が井に落ちかゝるのを見て惻隱の心を起すのは、其人の心と小兒とが一體になつたのである、又鳥獸の哀鳴をきいて同情をもつたとき、其人の心と鳥獸とが一體になつたのであつて、之を天地一體の仁と名づける。さうしてこの天地一體の仁は人間の本性に根ざして靈昭不昧な徳であるから又之を明德とも呼ぶ。この明德たゞ大人のみ存するのではなく小人にも存するのであるが、小人は天地一體の仁が私欲に蔽はれてゐるため、利害が衝突し忿怒相激するに至ると互に相害ひ、甚しきは骨肉相殘ふに至るのである。故に大人の學をなすものは私欲の蔽を去つて其明德を明かにし天地一體の本性に復ることをつとめるだけで、別に本體以外のものを持ち來つて増益する譯のものではない。これが大學の「明德を明かにする」教である。

次に大學は「民を親しくすること」を説いてゐるが、これも亦「明德を明かにする」手段方法に外ならぬ。即ち吾が父に親しむことより人の父に及ぼし、更にひろげて天下の人の父に及ぼすことによつて吾が仁は吾が父人の父、天下の父と一體になるわけである、かくの如

く兄弟君臣夫婦は勿論、山川鬼神鳥獸草木に至るまでこれを親しんで一體となるとき、吾が明德が天下に明かにせられたといはれるのである。

次に「至善」とは明德・親民の標準である。凡そ人の天性は純乎たる天理そのもので私欲の間雑なきものであるから之を至善と呼ぶ。かの靈昭不昧な明德は即ちこの至善の發現であつて、至善は明德の本體即ち良知である、この至善が發現するときは是非の判断となり、感ずるに随ひ應ずるに随ひ變動するものであるが、變動の中自ら天然の標準が備はつてゐる、これが即ち民彝物則の標準で本來吾心に存して外から議擬増損さるべきものでない。後世の人は（暗に朱子を指していふ）至善が吾心にあるを知らず、其私智を以て外物を揣摸測度して事事物物に定理があると考へた、そこで是非の標準が判らなくなつて支離決裂し人欲が肆になつて天理は亡び明德親民の學が亂れた、これは至善に止ることを知らないからである。至善に止ることと明德を明かにすること及び民を親しくすることの關係は恰も尺度と長さとの關係のやうなもので、尺度なしに長さは測れないと同様、至善なしには明德も親民も行はれ得ない。そこで至善に止まつて民を親しくし其明德を明かにするのが大人の學問である。

次に大學は「古の明德を天下に明かにせんと欲するものは……先づ其身を脩む、其身を脩めむと欲するものは先づ其心を正しくす、其心を正しくせむと欲するものは先づ其意を誠にす、其意を誠にせむと欲するものは先づ其知を致す、知を致すは物を格すにあり」といつて居るが、所謂「身を脩める」とは善をなし惡をさることで、身即ち形體が善をなし惡を去るためには、心即ち形體の主宰者が先づ善をなし惡を去ることを欲しなければならぬ、そこで大學は「其身を脩めむと欲するものは先づ其心を正しくす」といつたのである。次に心の本體は性で、性には不正がないから之を正す方法もない筈であるが、意念が發動すると正しからぬことも起つてくる。そこで心を正すためには直接心を正さうとせず、意念の發動する所について之を正す、即ち一善念が起ればこれを好むこと好色を好むがごとく、一惡念が起ればこれを惡むこと惡臭を惡むが如くにするによつて意が誠になり、自然心も正しくなるのである。故に「其心を正しくせむと欲するものは先づ其意を誠にす」といつたのである。併しもし善惡を區別することができなければ眞妄が錯雜して意を誠にするすべもない。そこで「知を致す」ことが必要となる。こゝに「知を致す」の「致」の字は禮記に「喪には

哀を致す」とある致の字と同じく致し極むる義で、「知」の字は吾心の良知を意味する、従つて「知を致す」とは後儒（朱子を指す）がいつた如く知識を擴充する意味でなく吾心の良知を極める意である。良知とは孟子の所謂是非の心で、是非の心は慮を待たずして知り學を待たずして能くする作用で、これが乃ち天命の性吾心の本體で自然に靈昭明覺なるものである。凡て意念の發るとき吾心の良知は必ずこれを知る、其發動が善いか悪いかはたゞ吾心の良知だけがこれを知つて他のあづかり知る所でない。そこで善惡を辨別して其意を誠にしようとするればたゞ良知の知る通りに致し極めるより外に方法はない。とはいふものの良知を致すことは決して影法師を捕へるやうな空虚なことではなく必ず確實なものでなければならぬ。「知を致すは物を格すにあり」といつた格物が即ちその實際の手のつけどころである。格物の「物」の字は事の義で詳しくいへば意念の發動する事件を意味する、「格」の字は古來色色によまれてゐるが、こゝでは孟子が「君の非心を格す」といつた格の字と同義で正す意に解すべきである。即ち格物とは意念の發動する一件一件の事項について良知の指し示すところに従つて惡を去つて善につくことで、かくて一件一件の事が正されて始めて吾良知の知る所が毫も缺けるところなく蔽はれるところなくして其至極を極めることができ、良知が致されて後意念の發動を誠にすることができる。そこで大學には「物格しくして后知至り、知至りて后意誠に、意誠にして后心正しく、心正しくして后身脩まる」といつたのである。蓋しその功夫から考へれば先後次第があるが、その實は唯一つで先後の區別はないのである。

以上は陽明の大學問の大略である。之によると陽明は朱子と種々な點に於いて意見を異にしてゐることが判る。(一)朱子は大學を古の大學教育法を記したとしてゐるのに對し陽明は大人の學即ち立派な人物に成る道を教へるものとみて居る。(二)朱子は古本に錯簡あるとして改訂を加へてゐるのに對し陽明は古本のまゝで完全であるといふ。(三)朱子は格物致知の傳が缺けてゐるとみて補傳を作つたのに對し、陽明は補傳の必要はないと主張する。(四)朱子が親民を新民に改めてよむべきだといふのに對し陽明は親民のまゝでよいといふ。(五)朱子は致知格物を物の理に窮め至ることによつて吾知を擴充する意に解してゐるのに對し、陽明は意念の發動する事件を正しくふみふことによつて良知の本性を窮極する義と見てゐる。これらが朱子と陽明との見解の主要な相違點である。かくの如く朱子と陽明とはその見解を異にして

ゐるが、就中尤も根本的な相違は朱子が主客兩觀の對立を認めて客觀の物理を窮めることに  
よりて主觀の知を完成するのを修養の根本と説いてゐるのに對し、陽明は主客の對立を否定  
して吾心の良知を致し極める方法のみで充分だと見てゐる點にある。この相違は更に淵源に  
遡ると、朱子が伊川の理一分殊の世界觀をうけついで居るのに對し、陽明は象山の心即理の  
世界觀を襲つてゐるためだともいひ得る。

程朱が起つて以來儒家の研究中心は五經から離れて四書に入り、四書の中でも大學が問題  
の中心と成つてゐる。朱子の大學章句は周張二程の説を紹述し大成した彼の哲學を背景とし  
て大學を解釋したもので、この解釋によつて朱子の道德説が成立したのであるが、陽明は又  
象山の心即理説を繼承してその哲學に應じ得るやうに大學の解釋を改造して茲に致良知の道  
徳説を樹立したものである。従つて哲學的には朱子と陽明との相違は程子の理一分殊説と象  
山の心即理との相違であるが、道德説としては大學の解釋の相違が兩者の分岐點であるとい  
ひ得る。

## 第八章 朱子晚年定論に就いて

陽明の學説が朱子のそれと相違することは略々上にのべた通りであるが、その相違は陽明  
が陸子の學にうけついでことに起因する。朱子と陸子とは南宋の大儒で、かつて鵝湖山に會  
見して所見を交換したが遂に意見の一致を見ることが出來ず、その後も屢々書簡を往復して  
論難をつゞけた。さうして朱子の門人と陸子の門人とは互に師説を墨守して久しい間相峙し  
てゐた。然るに元の時代になるとその間を調停して折中的態度をとる學者があらはれ出した。  
この時代の傾向を代表する學者の一人は吳澄である。

吳澄（一二四九—一三三三）字は幼清、草廬と號し、朱子三傳の學者程若庸に學んだが後  
に陸子の學にも共鳴して折中的態度をとるやうになつた。「朱陸二師の教たる一なり」とい  
ひ、又「朱子は問學に道る功多きに居りて、陸子は徳性を尊ぶを以て主となす、問學は徳性  
に本づかざれば則ち其蔽は必ず語言訓釋の末に偏せむ。故に學は必ず徳性を以て本となして

之を得るに庶幾からむ」などいつてゐるのは彼が朱陸の長所を認めつゝ折中をしてゐることを裏書する。さうしてこの態度は彼の再傳の弟子趙沄によつて繼承されてゐる。

趙沄は字を子常といひ東山と號して、かつて業を九江の黃楚望にうけたが、後には吳澄の弟子虞集に従學し、晩年には東山に屏居して著述を樂しんだ人であるが、その「對江右六君子策」の中に、

朱子の項平父に答へし書に「短を去り長を集むる」の言あり、豈鵝湖の論是に至りて合するあるか。それをして晩歲に合併せしむれば則ち其微言精義必ず契ふあるべし、而れども子靜は既に往けり。

といつてゐるのは彼が朱陸の關係を、早年には意見が一致しなかつたが、晩年に至つて合致するやうに成つたと考へて居ることを證する。これが朱陸早異晩同説の初めである。さうしてその後程敏政篁墩といふ人が出て趙沄の考をうけついで道一編といふ書物を作り、朱陸の異同を分けて三時期に區別し、その初めは氷炭の相反くが如きであつたが、中年には疑信相半するやうになり、終には輔車の相依る如き形勢にあつたといつてゐる。こゝに至つて朱陸

早異晩同の説が成り立つて、陽明はまた之をうけついで朱子晩年定論を作つた。

陽明は中年以後陸子の學に歸向するやうに成つたが、最初は朱子學を治めた人で、陸學に轉向した後も矢張り朱子に對する尊敬の念は失つてゐなかつた。正徳四年に席元山が彼に對して朱陸の異同を質問したとき、其評定を控へたこと、同六年に陸學の崇拜者王興庵と朱學の崇拜者徐成之とが論争をして判斷を乞うた際にも調停的態度を取つて「朱陸二子はよし學説上に於いて異つてゐてもともに聖人の徒たるを失はない、自分は朱子に於いて極りなき恩があつて戈を操つて室に入ることは欲せない」といつてゐるのは、彼の心持をよく言ひあらはしてゐる。さうして彼の陸學に對する歸向は年とともに深まつて行つて、正徳十三年古本大學を刊行するに及んでは最早朱子學と調停の餘地がなく成つたやうに思はれるが、それでもまだ朱子の中に自己と同じものを見出さうと努力して、その結果が朱子晩年定論の編述と成つたのである。同書の序に、

後龍場に謫官して夷に居り困に處し心を動し性を忍ぶの餘、恍として悟るあるが若く、體念探求再び寒暑を更へ之を五經四子に證して沛然江河を決して海に放るがごとし。然して

朱子晩年定論に就いて

後聖人の道坦として大路のごとくにして……獨り朱子の説に於いて相牴牾するあり、恆に心に疚みて切に疑ふ、朱子の賢にして豈此に於いて尙未だ察せざるあらむやと。留都（南京）に官するに及んで復朱子の書を取りて之を検求し然して後其晩歲固より已に舊説の非を大悟するを知れり。……

世の傳ふる所の集註或問の類は乃ち其中年未定の説にして……諸の語類の屬は又其門人勝心を挾んで以て已見を附す、固より朱子平日の説明に於いて相繆戾するものあり。而して世の學者此之を持循講習するのみにしてその悟後の論に於ては概乎としてそれ未だ聞くあらざるなり。……

予既に其説の朱子に繆らざるを幸とし又朱子の先づ我心の同然を得たるを喜ぶ。……

といつてゐるのを見ると陽明が如何に朱子に調和を求めつゝあつたかゞ判る。さうして晩年定論の最後に、

朱子の後眞西山許魯齋吳草廬の如き亦皆此に見るあり、……今草廬の一説を取つて後に附す。

といつて吳澄の文章を附録してゐるのを見ると、陽明の定論が吳澄一派の朱陸折中説から思付いたものと首肯せられる。

さて朱子晩年定論は朱子文集中から陽明の意見に近い内容をもつた書簡三十四篇を摘出して之が朱子晩年の考で、これに反くものは中年未定の論だと主張したものであるが、その中には朱子早年の文章も混じてゐて晩年定論と斷じがたいものがある。そこで同時の學者羅整庵は書を陽明に送つて「晩年定論の中に何京叔に與へた手紙が四通のせられてゐるが、何京叔は淳熙二年朱子四十二歳の時に歿して居るから此らの書簡はそれ以前のものと見なければならぬ、さうして論孟集註と或問とはその翌々年淳熙四年四十四歳の時に完成したのであるのに、晩年定論の序には之を中年未定の論だといつてゐる、四十四歳が中年で四十二歳以前が晩年とは受け取れない話でないか」と詰問した。之に對し陽明は、

某朱子晩年定論をつくる、蓋し已むを得ずして然り、中間年歳の早晩は誠に未だ考へざりし所あり、必ず盡く晩年に出でずといへども、固より晩年に出づるもの多し。然ども大意は委曲調停して此學を明かにするを重しとす。平生朱子の説に於いて神明著龜の如し、一



且之と背馳して心誠に未だ忍びざるあり、故に已むを得ずして此を爲くる。我を知るものは我に憂ふと謂ふべく我を知らざるものは我何をか求むるといふべし。蓋し朱子に牴牾するを忍びざるは其本心なり、已むを得ずして之と牴牾せるものは道固より此の如くにして直くせざれば見はれざればなり（傳習録中、答羅整庵書）。

といつてゐる。此の書簡を熟讀すると何とかして朱子に背くまいと心懸けた陽明の熱誠もその甲斐なく羅整庵の難詰にあつて辯明の辭を見出し得なく成つた。そこで陽明もその後は牽強附會調停論を打ち切つて敢然朱子に對抗して専ら致良知説を唱導した。かくて彼は、

大學古本は乃ち孔門相傳の舊本のみ。朱子は其脱誤する所あるを疑つて之を改正補輯せるも、某にありては則ち其本脱誤なく悉く其舊に従ふべしと謂ふ。夫れ孔子を過信するものは則ちこれあらむも、故らに朱子の文章を去つて其傳を削れるにはあらず。夫れ學は心に得るを貴ぶ、心に求めて非ならば其言孔子に出づるも敢て以て是とせざるなり、況やその孔子に及ばざるものをや。心に求めて是ならば其言庸常に出づといへども敢て以て非とせざるなり、況やその孔子に出づる者をや（傳習録中、答羅整庵書）。

と言ひ放つてゐる。陽明としては最初よりかくあるべきであつたらうが、無理にも朱子に調停を求めたところに朱子學に對する彼の氣持が窺はれる。

陽明歿後陳建（晴瀾と號す）は學菴通辯といふ一書を著し朱子及び陸子の書札を年代順に配列して、事實は寧ろ早同晩異を立證することを示した。さうして又「朱子には朱子の定論があり陸子には陸子の定論があつて強同すべきでない、虚靜をつとめて精神を完養しようとするのは陸子の定論で、涵養以て本を立て窮理以て知を致し、力行以て實を踐む、この三方面から修養しようといふのが朱子の定論である。朱子の書簡中にはその一面だけをすゝめたものもあるが、それは人に因つて教へを垂れた應病與藥の説で朱子學説の全體ではない。従つて單に涵養の一面を説いた文をあつめて朱陸を強同するのは朱子を誣するものだ」といつて陽明を攻撃してゐる。陳建の言ふ所はたしかに允當な説である。しかし朱子が涵養窮理力行の三面を並説したのに對し陽明が涵養の一面だけを高調して發展せしめたところに思想學説の發達があるのだとも見られる。この見地からいへば陽明學は朱子學の支離駁雜を整理して唯心的に一貫した道德説を樹立したものといひ得る。我が幕末の儒家佐藤一齋が傳習録欄外

書の末尾に書して、

訓注文義に至つては則ち朱子の諸説取るべきもの尠きにあらず。これを畫龍に譬ふ、晦翁は能く全龍を畫きて隻鱗片甲遺筆あるなし、但惜むらくは眼中一瞳子を缺くのみ。陽明出づるに及んで容易く筆を落して一點を加へ、然して後畫龍始めて活きて躍如たり。故に陽明の妙は阿堵にあり、晦翁の全龍を抹殺せるにあらず。

といった一節は多少偏倚するところもあるが、道德思想發達史上に於ける陽明の位置を巧にいひあらはしたものといつてよい。さうしてかうした立場から見れば、陽明は陸子の示唆に本づいて朱子學を改造したものと云ふこともできよう。

## 第九章 教育説

陽明の學説を大體のべ了つたから、こゝにその教育説について記す。

陽明の教育意見を考へる資料として先づ第一にあげなければならぬのは彼が龍場に於いて諸生に示した教條である。教條の内容は極めて簡單で(一)立志、(二)勤學、(三)改過、(四)責善の四條をあげて諭告して居るにすぎない。この諭告によると凡そ學問の第一歩は立志にあつて、學者は宜しく君子たらむことを志さなければならぬ。次に志が立つたなら學問に勤めなければならぬ、學問は聰慧警捷を尙ぶわけではなく勤確謙抑を重んずる。即ち知識の博大を目的とするのでなくして人格の高尙な人を作らうとするのである。次に人は賢愚の差別なく過を免れ得ないから過のあつたとき之を改めるに吝であつてはならないと諭し、最後に朋友の道は善を責めるにあるが、それにはお互に忠愛の情に本づいて婉曲に忠告すべきだと教へてゐる。以上四條は極めて平凡な訓誡であるが、最初に立志を強調してゐる所に主觀の心を絶對と見

る陽明の意見があらはれてゐるやうに思はれる。

次に陽明は正徳十三年（一五一八）四十七歳の時三泐の賦を平げた後贛州に於いて社學を立て、所屬各縣の子弟をあつめて教育につとめて居る。この社學に於ける課程は、毎日先づ徳を考へ、次に誦誦、次に習禮或は課做、次に講書、次に歌詩と定められてゐる。

徳を考へることは即ち脩身で、毎日清晨諸生が集まると教讀（先生）が順番に生徒に向つて、家庭内に於いて親を愛し長を敬つて居るか否か、街衢を往來するとき放蕩にして謹飭を缺くことはなきか否か、言語心術に忠信篤敬をかくことはないか否かを尋ねる。さうしてその反答に應じて適當に訓誨を加へて學業につかしめる、これが即ち徳を考へる方法である。

歌詩とは音樂のことで、生徒に之を課する目的は容を整へ氣を定め聲音を調節して詩を歌ふことによつて精神を宣暢し心氣を和平ならしめようとするにある。さうして其教へ方については生徒を四班に分けて毎日順番に一班が歌ひ他の三班が靜肅に之をきき、五日毎に四班全部が本學に集まつて合唱し、月の朔望に書院にあつまつて會歌する。これが歌詩の教へ方である。

習禮は心慮を澄肅にし容儀を閑雅ならしめて徳性の堅定に資せむとするもので、その教へ方は歌詩の場合の如く生徒を四班に分けて一日おきに一班づゝ順番に禮を習ひ他の三班を見學せしめ、十日毎に四班全體が本學で實習し朔望毎に書院を實習する。さうして習禮のある日は課做をやすむことゝして居る。

誦誦と講書とは書物を教へるのであるが、書物を教へるには生徒の能力を量つて二百字覚え得る人には百字位に止める。さうして之によつて常に精神能力に餘裕を持たせ、心意を寛虚にして義禮のそなはり、聰明の人物を作りあげる。

以上は贛州社學の教約であるが、彼は又教讀の職にあつた劉伯頌等に對してかゝる規定を立てた精神を説明して次の如くにいつてゐる。

古の教は教ふるに人倫を以てす、後世記誦詞章の習起りて先王の教亡ぶ。今童子を教ふるたゞ當に孝弟忠信禮義廉恥を以て専務となすべく、其栽培涵養の方は則ち宜しく之を誘ひ詩を歌はしめて其志意を發き、之を導きて禮を習はしめて其威儀を肅へ、之を諷して書を讀ましめ其知覺を開かしむべし。大抵童子の情は嬉遊を樂みて拘檢を憚る。草木の始めて

萌芽するとき之を舒暢すれば則ち條達し之を摧撓すれば則ち衰痿するが如し。今童子を教ふる必ずその趨向をして鼓舞せしめ、中心をして喜悅せしむれば則ち其進むこと自ら已む能はず、譬へば時雨春風の卉木を霑被すれば萌動發越して自然に日に長じ月に化し、もし氷霜剝落すれば則ち生意蕭索日に枯槁につくが如し、故に凡そ之を誘ひて詩を歌はしむるは但に其志意を發くのみならず、亦その跳號呼嘯を詠歌に洩して其幽抑結滯を音節に宣る所以なり。

之を導きて禮を習はしむるはたゞ其威儀を肅ふるのみならず亦周旋揖讓して其血脈を動盪し拜起屈伸して其筋骸を固束する所以なり。

之を諷して書を読ましむるはたゞ其知覺を開くのみならず亦沈潜反復して其心を存し抑揚諷誦して其志を宣へしむる所以なり。

凡そ此れ皆其志意を順導し其性情を調理し其鄙吝を潜消し其蠢頑を默化し日に之をして禮義に漸ましむる所以なり。是れ蓋し先王立教の微意なり。凡そ吾が教ふる所以は其意實に此にあり（傳習錄中、訓蒙大意）。

之を熟讀玩味すると、陽明教育の旨趣は、其志意を順導し其性情を調理して禮義にすましめようとするもので結局人間固有の天性を啓發するのを目的とするのであるから、讀書も其知覺を開發せしめるだけで注入をさけると同時に一般に輕視されてゐる音樂で性情を陶冶して禮儀で威儀をとよなへることを強調して居る。この注入教育を排して天性の啓發を主張したところに陽明の特徴を認めることができる。

正徳十年（一一一五）陽明はまた紫陽書院集の序を作つて朱子の白鹿書院學規には初めに親義別序信の五教の目をあげ、次に博學・審問・謹思・明辨・篤行の四者を爲學の序となし、次に言忠信・行篤敬を脩身の要、次に其義を正し其利を謀らざるを處事の要、己の欲せざる所を人に施す勿れを接物の要として列擧してゐるが、これらの簡條は各々が獨立した項目と成つて居て一貫した教育の精神があらはれてゐない。これは恐らく事毎に精察力行していつか貫通する時を待つ朱子の平生の主張に本づくものであらうが、その教育上に及ぼす影響はやゝもすると學問が雜駁になつて知識を外に求め、口耳の學、聲利の爲めの學等に流れる弊害がある。そこで教育には是非此等條項の上に一貫した精神がなくてはならぬといひ、さて

其精神を説明して、

君子の學はたゞ其心に得るを求むるのみ、天地を位し萬物を育するに至ると雖ども未だ吾心の外に出づるあらざるなり。孟子の所謂「學問の道は他なし其放心を求むるのみ」とは一言以て之を蔽へり。故に博學とは此を學ぶなり、審問とは此を問ふなり、慎思とは此を思ふなり、明辯とは此を辯ずるなり、篤行とは此を行ふなり。心外に事なし、心外に理なし、故に心外には學もなし。是の故に父子に於いて吾心の仁を盡し、君臣に於いて吾心の義を盡し、吾心の忠信を言ひ、吾心の篤敬を行ひ、心忿を懲し、心欲を窒ぎ、心善に遷り、心過を改め、庶事接物往くとして吾心を求盡して自慊とするにあらざるなし。之を植に譬ふれば、心は其根なり、學はその之を培擁するものなり、之を灌溉するものなり、扶植して刪鋤するものなり、根に事あるにあらざるなきなり。……故に吾特に其本を原ねて以て相勗む、操存講習の要あるに庶幾し、亦朱子の未だ盡さざる意を發明する所以なり。（文録四、紫陽書院集序）。

といつてゐる。これは明かに朱子教條の上に心學といふ一つの精神を加へたもので、こゝに

陽明教育觀の特徴を認め得る。

紫陽書院集序は陽明四十四歳の時かゝれた文であるが、その後五十四歳のときかゝれた稽山書院尊經閣記及び重修山陰縣儒學記（共に文録四所收）にも同じ意味が強調されてゐる。心學を闡明することを以て教育大眼目と考へたことは陽明の教育意見の中心をなすもので、龍場教條に立志を第一においたのも贛州社學に天性の啓發を力説したのも、皆この心學闡明の主張に本づくものである。さうしてこの心學闡明を教育の大眼目と推したてたことは朱子の教育學規が條項の羅列にすぎないのを不満に考へてその上に加上したものである。もし一齋の譬喩をかりていふことを許されるならば陽明の教育説は朱子によつて畫かれた全龍の密畫の上に一點の睛を添へたものといひ得るであらう。

## 餘論

朱子學と陽明學とは支那近世に於ける儒教の二つの大きな學派で相容れないものの如くに見られてゐるが、しかしその間に同じ點と異つた部分とがあつて全然相反するものではない。兩者が大學によつて脩身齊家治國平天下の道を講じてゐるのはその一致點で、ともに大學に本づく政治論道德說教育說であるといへる。たゞ兩者の相違するところは大學の解釋を異にしてゐる點であつて、その解釋を異にせざるを得ないやうに導いた原因は、兩者の哲學世界觀が違つてゐたためである。

大學が作られた當時の儒教には後世のやうにハッキリした世界觀哲學はなかつたらしいが、魏晉六朝以來支那に入つた佛教の哲學に刺戟されて、儒教の道德說の背後にも之に對抗する哲學を必要とするに至つた。そこで佛教の哲學によつて鍊られた思索方法で新しく哲學が構成されて、之に本づいて儒教道德が説明されるやうに成つたのが朱子及び陽明の學說である。

さうして朱子學と陽明學との對立はその哲學の相違に原因してゐるのであるとすれば、兩者の相違は如何に佛教哲學をとり入れたかの相違といつてもよいであらう。

朱子學にしても陽明學にしても、それが構成された時代は禪の隆盛を極めた時代であるから、その直接影響は禪からうけたのである。しかし一概に禪といつても種々な宗派が分れてゐて必ずしも同じとはいはれない、今一々それらの宗派の同異を論ずる餘裕もなく、又之を論じ得る素養も持たぬが、唐末の名僧宗密の説明によると凡そ禪の諸宗はその主張の中心について考へると、一、息妄修心宗と、二、泯絕無歸宗と、三、直顯心性宗との三つに彙類される。この三大宗の第一は唯識の哲學を背景にした修禪說であるが、第二は三論の哲學に根據する禪定であり、第三は主として華嚴の哲學に本づく修禪說であるといつてゐる。この三大宗派の第二泯絕無歸宗の宗旨即ち三論系の教義は老莊に近い傾向があつて、老莊と此派とは緊密な關係を持つてゐるが、儒教とは少し縁遠い教義である、そこで朱子學派でも陽明學派でも此派に對してはいつも反對してゐる、彼等が釋老の虛無を排撃したのは主として此派の主張にあてはまる。しかるに第一の息妄修心宗即ち唯識系の考へと、第三の直顯心性宗即

ち華嚴の教理とは儒家と提携し得る要素をもつてゐる。さうして朱子學の哲學は華嚴の教理に本づいて改造されたものであり、陽明學の哲學は唯識的な見解であると見られる。

朱子學の源流たる周子の太極圖説はさながら起信論の流轉門の説明をきく感があつて既に華嚴の緣起思想に似た點があらはれてゐるが、更に下つて程子の理一分殊説に至ると明瞭に華嚴の理事無礙法界觀の影響が認められる。さうしてこれらを受けついで朱子は勿論佛教に對して反抗的態度には出てゐるが、既に周程によつて取り入れられた華嚴的の考へ方は残つてゐる。彼が理一分殊の理を説明して「人々一太極あり、物々一太極あり、合して之をいへば萬物は一太極に體統せられ、分ちていへば一物各々太極を具へて一物の中天理完具して相假借せず相陵奪せず、譬へば月の天にあるや只一なるも、散じて江湖に在るに及んでは處處に見はるゝも、月分るといふべからざるが如し」といつた一節は、宛然華嚴の十玄緣起、殊に因陀羅網の譬喩をきくが如き感がある。そこで朱子學の哲學には華嚴の哲理が影響してゐると私は考へる。

朱子はかくの如く華嚴の教理に影響されてゐるらしく見えるが、佛教の唯心論的な考へには反對してゐる。彼が「聖人の學は心に本づいて理を窮め、理に順つて物に應ずることを旨とするが、釋氏は心を以て心を求め、心を以て心を使ふもので正しくない」と排斥してゐるのはその證左である。朱子はかくの如く佛教の唯心論的傾向を排斥してゐるが、陽明は却つてこの唯心論的世界觀をうけ入れてゐる。陽明學の淵源ともいふべき陸象山が既に「宇宙は即ち是れ吾心、吾心は即ち是れ宇宙」と喝破して吾心以外に宇宙の存在しないことを力説してゐるが、更に下つて陽明に至るとこの傾向が一層明白に成つてゐる。彼が南鎮に遊んだ時一友人が岩間の花木を指して、心外に物なしといつても此花木は深山の中にあつて吾々の心に關係なく自ら咲き散つてゐるではないかと尋ねると、陽明は之に答へて君が此花を見ない時は此花は君の心とともに同じく寂に歸してゐるが、君が此花を見た時、此華の顏色が一時にあらはれてくるのであつて君の心以外に此花はない筈だといつたといふが、この一條の問答は最も明瞭に彼の唯心論的の考へ方を説明してゐる。さうしてかうした唯心論的の考へは支那本來の思想にはかつてなかつたところで唯識宗の渡來とともにあらはれ來つたものである。そこで陽明の哲學は佛教の唯識系の思想或は禪の息妄修心宗から影響をうけたものと

考へられる。

華嚴系の思想をうけついで朱子學では理一分殊の哲學を構成して、之によつて大學を説明して格物窮理を説いたのに對し、唯識系の影響をうけた陽明學では心即理の哲學を立て、これによつて大學を説明して致良知説を唱へ出した。さうして格物窮理の立場から、讀書を窮理の一法と認めて聖經賢傳の講究に力をそゝぎこれによつて社會を教育しようとしたのが朱子の道德説教育論である、致良知の立場を守つて、たゞ人間が逢着する事件事件に對する意念の發動を正して行くところに修身治國の目的が達せられると見たのが、陽明の道德論教育説である。

今兩者の長所短所を比較してみると、朱子の學説に於いては一理が動いて理氣の對立があらはれる過程の説明が足りないやうに思はれる。この點に於いて陽明の心即理説は矛盾を脱してゐるが、最後に致良知を説くにあたつて私欲を去れと強調しながら、私欲の由て來るところが明かにされてゐないのは物足りない。これらは私の理解が未だ充分でないためであるかも知れないが、兎に角現在の私には不満足に考へられる。次に實踐道德を説くにあたつて

朱子の格物窮理説は危険のないよい指導方針ではあるが、窮理の方法として讀書を重視した結果は、やゝもすると書籍の講究に日がくれて生きた指導精神を忘れる傾向がある、清朝に於ける考證學者の中にこの弊害を見出し得るであらう。致良知を力説し事上磨鍊を重視した陽明學は朱子學のこの缺陷を補ひ得たが、動もすると自己内心の満足が主になつて一步を誤ると反道德的の本能までが肯定せられる傾きがある、李卓吾の放縱な生活の如きがその一例である。かやうな事例はその極端なものであらうが、そこまで行かなくても學問研究が輕視せられて自分一人の獨斷に陥りやすい弊は確かに存在するやうに思はれる。

日本に朱子學の渡來したのは南北朝頃に始まるが、それが一般に尊信されて一世を指導するに至つたのは徳川時代である。この時代幕府の教權は朱子學であり、民間教育は皆朱子の四書集註によつて行はれてゐた。さうしてそれが段々日本化して闇齋學となり、水戸學と成つたもので、朱子學は我が日本に於ても非常な影響をもたらしてゐる。陽明學が我國に入つたのは室町時代の僧了菴和尚からだとしてゐるが、それが生きて動きだしたのは矢張り徳川時代で、中江藤樹や熊澤蕃山の力に負ふものである。しかし當時の陽明學はまだ朱子學に



朱子・陽明

對抗するだけの力を持つてゐなかつたが、幕末に至つて佐藤一齋があらはれ、その門下に横井小楠・佐久間象山・伊藤潜龍等が出で、小楠の門下に橋本左内、象山の弟子に吉田松陰、潜龍の門に大久保甲東・西郷南洲等を出して、これ等の人が維新の大業をなすに與つて力あつたことを思ふと陽明學の影響も亦決して輕視することができない。要するに朱子と陽明とは支那近世儒者の代表者でその後世に及ぼした影響は誠に大きかつたが、單に支那だけでなく我國の教學にも大きな影響を與へてゐることを一言してこの稿を終る。

精興社印刷 大森製本

昭和十一年十月二十五日印 刷  
昭和十一年十月三十日第一刷發行

大教育家文庫  
朱子・陽明



著者	武者内義雄
發行者	東京市神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波茂雄
印刷者	東京市神田區錦町三丁目十一番地 白井赫太郎

發行所 東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話(35)一〇一八七・〇一八八番  
九段(35)一〇二八九・〇二九〇番  
振替口座東京七四四一六番

IT 2K34







